

# KHM 106 における „sich hinter den Ofen setzen“ について

— 翻訳・誤解・誤訳 —

伊 藤 卓 立

## I

星野勉は『能の翻訳 一文化の翻訳は如何にして可能か—』<sup>1)</sup>において、一般に人は、「一つの文化から別の文化へありとあらゆるものを直接に移し換えることができるという、根拠のない幻想を抱きがちである」<sup>2)</sup>、しかし、翻訳という異文化理解は生易しい事柄ではなく、「それは言語コードやコンテキストの違いによる意味の変容を通じて、対象となる言語・文化のうちに、もとの意味とは異なる意味を創造する解釈に他ならない。…優れた『翻訳』とは、自他の文化の類似性と差異性とを気づかせ、自他の文化理解を深めることに資する。…『翻訳』は、それが彫琢されたものであればあるほど、…文化的に見て極めて創造的な営為である」<sup>3)</sup>、と言い、他方、「謡曲の『翻訳』において切り捨てられたものもあるはずである。…それは翻訳不可能で、特殊日本的なものなのであろうか。<sup>4)</sup>ここからも、『翻訳』が、翻訳不可能性ととのせめぎあいのなかで、見通しえない他者性のゆえに絶えず誤解、誤読、誤訳に付きまといわれながら、そのつど架けられる『浮舟 (floating bridge)』<sup>5)</sup>のようなものであることが見えてくる」<sup>6)</sup>、と言っている。即ち、「彫琢された優れた翻訳」は「一種の新しい意味を創造する解釈」であり、自他の文化理解の深化に資する「極めて文化的にして創造的な学術活動」であり、「創造的理解」<sup>7)</sup>である。しかし、異文化・異言語間に横たわる「翻訳不可能性」の存在は否定し得ない事実なので、誤解、誤読、誤訳が見出されれば、それを正し、異文化間に架けられた翻訳という「浮舟」を新たにかけ直す必要がある。

星野のこの考えは、ドイツ文学を邦訳する際にも該当する事は当然である。そこで、高尚な、しかし、「灰色の」<sup>8)</sup>理論を持ち出す必要など全くない卑近な例として „Der arme Müllerburschen und das Kätzchen“ (KHM

106) を取り上げ、その本文を見直すと、一見問題はなさそうであるが、「誤解、誤読、誤訳」が既にその冒頭部分に垣間見える。

In einer Mühle lebte ein alter Müller, der hatte weder Frau noch Kinder, und drei Müllerburschen dienten bei ihm. Wie sie nun etliche Jahre bei ihm gewesen waren, sagte er eines Tages zu ihnen: »Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen; zieht aus, und wer mir das beste Pferde nach Hause bringt, dem will ich die Mühle geben, und er soll mich dafür bis an meinen Tod verpflegen.«<sup>9)</sup>

アンダーラインの箇所は、「わしは老いたので、ストーブの後ろに座りたい」と邦訳して文法的には正しいのであるが、「ストーブの後ろに座る」とは一体どのような意味合いなのか、日本人一般には理解できないのではなからうか。日本人にとって、「ストーブの後ろに座る」ならば、「火傷してしまう、だからストーブの後ろに座る事などできない」、というのが合理的な思考であろう。この判断の正当性は、フランクフルトにあるゲーテハウス内に設置されている竈やストーブの写真を見れば、一目瞭然である。<sup>10)</sup> それ故、「sich hinter den Ofen setzen」という語法には何か特別な意味があるのではないか、或いは、Ofen の文化（史）的背後には、日本の「竈」や「囲炉裏」という伝統的な文化（史）には存在しない何か隠れているのではあるまいか、という疑問が浮かぶ。

そこで、先ず、この疑問を解決する第一歩として、先行する邦訳を参照したい。

- 1) 完訳 グリム童話（三） 金田鬼一訳（全5冊） 岩波書店 改訂版第1刷 1979. 249頁。（岩波文庫）  
「私も、としをとってな、ストーブの後ろに座りたくなつたよ。」
- 2) グリム童話集（3） 植田敏郎訳 偕成社 第1刷 1980. 326頁。  
「わしはもう年をとっている。だから、暖炉のうしろにすわろうと思うのだ。」
- 3) ヘンゼルとグレーテル（グリム童話集II） 植田敏郎訳 新潮社 1993. 121頁。（新潮文庫）

「わしはもう年をとっている。だから、暖炉のうしろにすわろうと思うのだ。」

- 4) 完訳 グリム童話Ⅱ ごめんなさいお母さん 関 敬吾／川端豊彦訳 Kadokawa 旧版 1954, 新版 1999, 285 頁。(角川文庫)  
「わしはもう年を取ったし、隠居したくなった。」
- 5) 完訳 グリム童話集 全7巻 野村 法訳 筑摩書房 1999～2000, ちくま文庫(訂正)版 2005～2006, 第5巻, 34 頁。  
「わたしも年をとった。もうストーブのうしろに座って、のんびりしたい。」
- 6) 完訳 グリム童話集 2 池田香代子訳 講談社 2008, 419 頁。  
「わしももう年だ。もう隠居して、暖炉のかげにすわっていたくなったよ。」
- 7) グリム童話全集 橋本 孝／天沼春樹訳 西村書店 2013, 370 頁。  
「わたしは老いぼれたので、暖炉のうしろにすわってのんびり隠居したい。」

以上の7種類の邦訳をまとめると、次のようになる：

- ①「暖炉の後ろに座る」と解釈したのが金田, 植田 (1, 2, 3)
- ②「ストーブのうしろに座る」+「のんびりする」と解釈したのが野村
- ③「隠居する」と解釈したのが関／川端
- ④「暖炉の後ろ(かげ)に座る」+「隠居する」と解釈したのが橋本／天沼と池田

ここで浮かび上がる疑問点：

- ①「暖炉の後ろに座る」とする直訳的解釈は文法的に正しいように見えるが、『図解ドイツ語文法』(Grammatik in Bildern)<sup>11)</sup>の hinter の例を見るまでもなく、「物理的に暖炉の後ろに座れば、火傷をしてしまうので、暖炉の後ろに座るのは不可能である。そもそも暖炉の後ろに人間がすわる空間が存在するのか」という意味内容上の疑問が残る。
- ② „sich hinter den Ofen setzen“ を「ストーブの後ろに座る」と邦訳したならば、何を持ってして「のんびりする」という邦訳を付け加えたのか、疑問である。
- ③「隠居する」とする解釈には文法的理解を越えた乖離が存在するが、「年

老いた」,「それ故, だから, ので」(und),「隠居する」と解釈するならば, 先行文(ich bin alt)と後続文(<ich> will mich hinter den Ofen setzen)との間に意味内容上矛盾はない。しかし, この場合, „sich hinter den Ofen setzen“を「隠居する」と解釈する語学上の確証がない。

④「暖炉の後ろに座り, 隠居する; 隠居して, 暖炉のかげにすわる」という解釈は, ②の場合と同様に, 語学的にも意味内容的にも折衷的である。即ち, „sich hinter den Ofen setzen“を先ず「暖炉の後ろに座る」と解釈して, 更に「隠居する」を後付けしているのであるが, 何をもってして「隠居する」と邦訳したのであろうか。即ち, この折衷的解釈では, „sich hinter den Ofen setzen“の語学的に正しい理解に到っていないので, その根拠は分からないが, 先行する邦訳や英訳等を参考にして, 訳者達は「隠居する」を「暖炉の後ろに座る」に付加したのではあるまいか。

いずれにせよ, 邦語としては,「暖炉の後ろに座る」と「隠居する」との間には概念上克服し得ない乖離が存在するのであるから, 上で明らかにされた疑問点は, 図らずも, これらの邦訳の何れかに「誤解, 誤読, 誤訳」が隠されている事を証明している。そこで, 「暖炉の後ろに座る」, 「隠居する」, 「ストーブのうしろに座って, のんびりする」, 或いは, 「暖炉の後ろに座り, 隠居する」, という邦訳の中で, どの邦訳が誤解・誤訳であり, どの邦訳が正しい解釈なのか, この問題を明らかにする事がこの小論のテーマになる。

## II

次に著者の狭い範囲内で入手できた少数の日本語以外の外国語訳を参照したい。

6) The Complete Grimm's Fairy Tales. Translated by Margaret Hunt. (Pantheon Books) New York 1944, thoroughly revised, corrected and completed by James Stern. (Pantheon Books) New York 1972. S. 482.

I am old, and want to sit behind the stove.

7) The Complete Illustrated Works of the Brothers Grimm. First published (George Routledge & Sons) 1853, redesigned edition (Chancellor Press) London 1984, reprinted 1996. S. 517.

I am old, and shall retire from business soon.

- 8) The Complete Brothers Grimm Fairy Tales. Edited by Lily Owens. (Gramercy Books) New York 1996. S. 346.

I am getting old, and I shall soon want to sit in the chimney-corner without work.

- 9) Grimm's Complete Fairy Tales. (International Collectors Library) New York 2000. S. 262.

I am old and want to sit in the chimney-corner (.)

- 10) Jacob et Wilhelm Grimm: Contes merveilleux. Tome I. Édition du groupe «Ebooks libres gratuits».<sup>12)</sup>

Je suis vieux et je veux maintenant prendre ma retraite au coin du feu.

- 11) このフランス語訳はとある web サイトから取得した。<sup>13)</sup>

Ju sui vieux et je veux prendre ma retraite.

- 12) このスペイン語訳は Grimmstories.com から取得した。<sup>14)</sup>

Soy viejo y quiero retirarme a descansar.

以上四種類の英訳，二種類のフランス語訳，一種類のスペイン語訳の問題箇所を以下で検討したい。

⑤英語訳6の，sit behind the stove は，上の疑問点①と同様に，「暖炉の後ろに座る」とする直訳的解釈であり，一見文法的に正しいように見えるが，「火傷をしてしまう」という意味内容上の疑問が残る。

⑥英語訳7で用いられている retire from business は，上の疑問点②と同じく，「隠居する」と解釈している事になり，「先行文」(年を取った)，「それ故に」(and)，「後続文」(引退，隠居する)との間に意味内容上矛盾はないが，現状においては，„sich hinter den Ofen setzen“を「隠居する」と解釈する語学上の確証がない。

⑦英語訳8と9で用いられている the chimney-corner は，OED (2nd edition, Vol. 4. 1989.)において次のように説明されている。

The corner or side of an open fireplace or hearth, i.e. of the large projecting or retreating fireplace of olden times; the fireside; the seat on each end of the firegrate (.) (p. 123)

他方、『英和中辞典』（第三版 研究社 1971年）によると、「(昔風の大きい壁炉の) 炉すみ (暖かくて居心地のよい座席で通例その家の主人が占める)」(250頁)と説明され、日本の日常の生活圏ではこのような大型の壁炉はめったに見かけないので、理解を助ける挿画まで付いているが、<sup>15)</sup>この挿画は我々にとっても明解な説明となっていて、非常に重要である。また、『英和大辞典』（岩波1970年）によると、「炉のすみ (昔風の大きな炉 (fireplace) の前方空間のすみの座席)」(289頁)と説明されている。

下に掲げた絵は、1888年に刊行された „The English Illustrated Magazine“ に掲載された William Biscombe Gardner (1847-1919) の作品 „Chimney Corner, Temple Farm, Capel“ では大きな竈が描かれ、その中央に直火が、焚火のように燃える炉があり、左右の角 (chimney corner) には椅子が置かれ、明かり取りの窓まで付いている右側の椅子には編み物をする女性が座っている。Gardner のこの一枚の絵は「昔風の大きな炉の前方空間のすみの座席」が如何なるものか、如実に示している。



ところで、既に、「そもそも暖炉の後ろに人間が座る空間が存在するのか」、という疑問を提示しておいたが、この疑問に対して示唆に富んでいるのが „Der Stiefel von Büffelleider“ (KHM 199) <sup>16)</sup> である。そこで、その

内容を簡単にまとめておきたい。

森の中で迷って二日間何も食べていない兵隊と猟師は強盗どもの住処を見つけ、留守を守る老婆に訴えて、食べ物にありつこうとすると、強盗どもに見つかったら命はないよ、と老婆は断ったが、二人があまりにも空腹を訴えるので、情けに負けた老婆は、二人に次のように言う。「竈の後ろにもぐり込みな。奴らが寝込んだら、食べ残しをお前達に回してやるよ。」(Kriecht hinter den Ofen, wenn sie etwas übriglassen und eingeschlafen sind, so will ich's euch zustecken.) そこで二人は竈の後ろに隠れるが、その直後に帰宅した強盗どもは早速食事を始めた、すると、料理のにおいを嗅いだ「兵隊は大きな咳をし始めた。それを聞きつけると強盗どもはナイフやホークを投げ捨てて飛び上がり、竈の後ろに二人を見つけた。」(Aber der Soldat fing an, laut zu husten. Als die Räuber das hörten, warfen sie Messer und Gabel hin, sprangen auf und entdeckten die beiden hinter dem Ofen.)

この KHM 199 に従うと、先ず重要な事は、竈の後ろには二人の大人が隠れる事ができる空間がある、という事である。しかも、「竈の後ろにある(空間)」「Raum „hinter dem Ofen“」は、二人の大人が隠れる事ができる「広さ」であるにもかかわらず、正面から「見えない」「空間」である。それに対して、英訳で使用された „in the chimney-corner“ は、Gardner の作品が示しているように、大きな竈の「前方空間の角」とはいえ、丸見えで、隠れる事などできない「空間」である。それ故、英訳の „in the chimney-corner“ が意味する「空間」は、ドイツ語の „hinter den Ofen“ が意味する「空間」とは位置的に全く「異なる」「空間」である、と言うべきである。

⑧英語訳 8 で用いられている sit in the chimney-corner without work は、上の疑問点④と同様に、語学的にも意味内容的にも折衷的である。即ち、„sich hinter den Ofen setzen“ を先ず sit in the chimney-corner と解釈して、更に without work を後付けしているので、既に④で述べた疑問が全て当て嵌まる。

⑨フランス語訳 10 で用いられている retraite au coin du feu は、邦訳 5 と 6、英訳 8 と同様に、「隠居」(retraite) と「炉端」(au coin du feu) を組み合わせ

せた翻訳になっていて、語学的にも意味内容的にも折衷的であり、④で既に述べた疑問が全て当て嵌まる。

⑩フランス語訳 11 で用いられている *prendre ma retraite* は、邦訳 4 と英語訳 7 と同様に、„*sich hinter den Ofen setzen*“ を単純に「隠居する」と解釈している。即ち、先行文「年を取った,」「それ故に」(et)、後続文「隠居する」との間に意味内容上矛盾はない。しかし、„*sich hinter den Ofen setzen*“ を „*je veux prendre ma retraite*“ (隠居する) と解釈する語学上の確証がない。

⑪スペイン語訳 12 で用いられている *retirarme a descansar* の *descansar* は「休む = *ruhen*」を意味する。また、*a descansar* は目的を示す用法で、ドイツ語で言えば、その意味するところは „*um zu ruhen, sich zu erholen*“<sup>17)</sup> である、それ故、このスペイン語訳は、「のんびり過ごすために隠居したい (隠居してのんびり過ごしたい)」, という意味である。この点、邦訳 6 と 7 と同様の解釈が行われている事になるが、„*sich hinter den Ofen setzen*“ の何を持ってして *a descansar* というスペイン語に翻訳したかは不明である。しかし、「暖炉の後ろ (かげ) に座る」と訳出せず、総合的に解釈して *retirarme a descansar* 全体で、「隠居」とその目的である「ゆっくり過ごす」を一概念として訳出している、と考えると、*retirarme a descansar* というスペイン語訳は一番示唆に富んでいる、と言える。しかし、上の②と同じ問題点が残る。

以上の日本語訳、英語訳、フランス語訳、スペイン語訳の検討の結果、„*sich hinter den Ofen setzen*“ の解釈は次の四通りになる：1) 「暖炉の後ろに座る」、2) 「隠居する」、3) 「隠居してのんびり過ごす」、4) 「隠居して、暖炉の後ろに座る」。この結果は、邦訳の検討の結果とほぼ一致するので、この検討によって我々の問題提起の正しさが確認された事になる。

### III-1

次に、„*sich hinter den Ofen setzen*“ の意味内容を明らかにするために、独和辞典の検討を行いたい。なお、多少のニュアンスの差はあるが、*sich setzen* も *sitzen* も *hocken* も、その意味内容上はほぼ同じと考え、論考を進める。

① 木村・相良独和辞典 博文館 1940. 955 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔諺〕(俗語)(外出嫌いで)宅にばかりゐる, 引っ込みがちである。

- ② 相良大独和辞典 博友社 初版 1958. 18 版 1972. 1058 頁。

hinterm Ofen hocken: (外出嫌いで)宅にばかりいる, 引っ込みがちである。

hinter dem warmen Ofen sitzen: 安易徒食する。

- ③ 佐藤通次: 独和言林 白水社 1968. 918 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔比〕家ばかりにくすぶっている(引っ込みがちである)

- ④ 小学館 独和大辞典 小学館 1985. 1582 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔比〕(転義・比喩的表現)部屋にこもっている, 出不精である。

- ⑤ 郁文堂独和辞典 郁文堂 1987. 1019 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔比〕(比喩・転義の表現)家の中に引きこもってばかりいる。

- ⑥ 研究社 独和中辞典 研究社 1996. 1017 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔比〕(比喩的な言い回し)(外出嫌いで)自宅にばかりいる。引っ込みがちである。

- ⑦ フロイデ独和辞典: 白水社 2003. 1044 頁。

hinterm Ofen hocken: 〔話〕(口語的な表現)家にばかり閉じこもっている。出不精である。

これらの独和辞典では、『相良大独和辞典』を除いて、hinterm Ofen hocken という用法は「転義・比喩的表現」である、即ち、「煖炉の後ろに座る」という物理的・現実的表現から「家に閉じこもっている」という意味に「転義した」「比喩的表現」としてのみ使用される、という注がついている。そこで、「わしは年だ」、それ故、「家に閉じこもっていたい」、と解釈しても、文法上も意味内容上も全く矛盾はない、しかし、この「転義・比喩的表現」を取り入れている日本の翻訳者は一人もいないので、「転義・比喩的表現」として使用される sich hinter den Ofen setzen という語法を誤読・誤解して、物理的事実として「わしは年だ」、それ故、現実に「煖炉の後ろに座りたい」、即ち、実際に「煖炉の後ろに座り、火傷をしたい」という、意味内容上破

綻している解釈をしている事になる。他方、「転義・比喩的表現」という語注に着目すれば、英語訳 *retire from business* やフランス語訳 *prendre ma retraite* やスペイン語訳 *retirarme a descansar* と同様に、実際に「煖炉の後ろに座りたい」という概念と関連する表現は一切使用せず、ただ「隠居したい」と邦訳した関／川端訳のみが正しく、他の邦訳は、全くの誤読、誤解、誤訳であるように見える。

### III-2

そこで次に、本文末に掲げたドイツ語辞典のリストの中から比較的新しい現代ドイツ語辞典を選んで検討したい。

- ① Ullstein (S. 649).  
umg.: du hockst den ganzen Tag hinterm Ofen. (kommst nicht aus den Haus, siehst dich nicht um in der Welt) (.)
- ② Duden I, Bd. 2 (S. 505).  
(bildl.) : hinterm Ofen hocken (ein Stubenhocker sein).
- ③ Agricola (S. 462).  
(übertr.) hinterm Ofen hochen, nicht hinterm Ofen vorkommen (umg; ein Stubenhocker sein) (.)
- ④ Klappenbach, Bd. 4 (S. 2691).  
hinter dem, am Ofen sitzen, umg. hocken; (bildl.) er hockt immer hinterm Ofen (kommt nicht an die frische Luft) (.)
- ⑤ Brockhaus-Wahrig, Bd. 4 (S. 892).  
den ganzen Tag, nur hinter dem Ofen hocken (fig) zu viel zu Hause sein, ein Stubenhocker sein (.)
- ⑥ Knaurs (S. 711).  
nur hinterm Ofen sitzen, hocken (ugs.) immer zu Hause sein, nie ausgehen (.)
- ⑦ Duden II, Bd. 5 (Stilwörterbuch) (S. 2426)  
(Übertr.) er hockt immer dem Ofen (bleibt immer zu Hause, geht nie aus) (.)
- ⑧ Pons DaF (S. 1001).  
hinter dem Ofen hocken, sich hinter den Ofen verkriechen: drückt aus, dass jmd. immer nur im Haus bleibt und wenig Kontakt zu anderen Menschen hat (.)

⑨ Langenscheidt DaF (S. 814).

hinter den Ofen hocken; sich hinter den Ofen verkriechen umg. immer im Haus bleiben und nicht nach draußen gehen.

以上の全ての現代ドイツ語辞典は、「比喩的用法」として、または、「口語的用法」として使用される、と注している。したがって、独和辞典の説明は全て、これらのドイツ語辞典と一致している。それ故、この場合も独和辞典の検討の結果と同様に、「家に閉じこもる」という辞書の説明を無視した、「煖炉の後ろに座る」という邦訳は、総て誤読、誤解、誤訳である、と判断する事ができる。懸案として残るのは、ただ一言で「隠居したい」と邦訳した関／川端訳のみになる。

ところで、注目すべきは、Pons DaF の、„hinter dem Ofen hocken: drückt aus, dass jmd. immer nur im Haus bleibt und wenig Kontakt zu anderen Menschen hat“, という説明である。なぜならば、この説明は、現在の日本の社会現象の一つである「引きこもり」に近い概念を表現しているからであり、„(jemand, der) immer nur im Haus bleibt und wenig Kontakt zu anderen Menschen hat“ を表現する語として „Stubenhocker“ が „Duden I, Bd. 2 (Stilwörterbuch)“, „Agricola“, „Brockhaus-Wahrig“ においても使用されているからである。そこで、次に „Stubenhocker“ を検討したい。

先ず独和辞典を調べてみると、Stubenhocker に付けられた文体指示は次の通りである。

- ① 「俗語・俗語的日常語」(小学館 独和大辞典)
- ② 「口語」(研究社 ドイツ語中辞典)
- ③ 「口語的な表現」(フロイデ独和辞典)

これらの文体指示をまとめれば、現代ドイツ語において Stubenhocker は「俗語的日常語」である、と言えるが、我々にとってあまり重要な指摘ではない。そこで、続いてドイツ語辞典を調べてみると Stubenhocker に付けられた指示は次の通りである。

- ⑤ abwertend (Klappenbach Bd. 5, S. 3643)
- ⑥ umgangssprachlich; abwertend (Brockhaus-Wahrig Bd. 6, S. 116)

- ⑦ umgangssprachlich, abwertend (Duden II, Bd. 7, S. 3297)
- ③ umgangssprachlich, abwertend (Pons DaF, S. 1327)
- ④ umgangssprachlich, pejorativ, abwertend, verächtlich (Langenscheidt DaF, S. 1065)

以上の5種類の辞書に共通する Stubenhocker の言語位相（レベル）(Stilebene)は「口語」であり、<sup>18)</sup> 言語慣用（使用）(Sprachgebrauch)は「卑属的表現」である。<sup>19)</sup> 特に⑨の„Langenscheid DaF“には„Das einsprachige Wörterbuch für alle, die Deutsch lernen“という副題までも付いているので、「貶称的、卑属的、軽蔑的」(pejorativ, abwertend, verächtlich)という、外国人には親切な文体指示が付いている。これらの指示から判断すると、Stubenhocker は内容的に品位、品格が欠ける言葉である。ところで、KHMを「一種の教育の書として」(als ein Erziehungsbuch)<sup>20)</sup> 考えていたグリム兄弟は、第2版の序において「子供たちに相応しくない表現はどれも注意深く解消しました」<sup>21)</sup> と言っているので、その様な言葉や表現は削除されるか推敲されたはずである。そこで、初版を繙くと、KHM 106 の問題の箇所は次のようになっている。

Wie sie nun etliche Jahre bei ihm gedient hatten, sagte er zu ihnen: „zieht einmal fort, und wer mir das beste Pferde nach Haus bringt, dem will ich die Mühle geben.“<sup>22)</sup>

即ち、mich hinter den Ofen setzen という表現は初版では使用されていなかったのである。又、第2版と第3版でも使用されていない。それ故、この一文は、それ以後の版で書き込まれて第7版（決定版）に残っているのであるから、グリム兄弟によって「子供達にふさわしい表現」と見なされた、という事になる。すると、mich hinter den Ofen setzen には、Stubenhocker によっては置き換えることができない、しかし、現在では希薄になってしまった意味合いが、KHMの成立時代には通用していたのではないかと推測する事ができる。

### III-3

そこで、上で到達した推測を確かめるために、KHMの成立時代を反映した古い辞書を用いてこの用法の意味合いを確認したい。

- ① Oertel (1934, S. 147): hinter dem Ofen sitzen, hocken, liegen, a) wann es kalt ist, gern in der Nähe des Ofens bleiben, b) müssig und trägt zu Hause bleiben.
- ② Heinsius (1840, Bd. 3, S. 316): hinter dem Ofen sitzen oder liegen, hocken, müßig zu Hause bleiben, aus Trägheit und Bequemlichkeit nicht gern das Haus verlassen(.)
- ③ Ditscheiner-Wessely (1892, S. 468): hinter dem Ofen hocken od. sitzen, ein Stubenhocker sein.
- ④ Adelung (1798, Bd. 3, S. 581): Hinter dem Ofen sitzen oder liegen, auch figurlich im gemeinen Leben, müßig zu Hause bleiben.
- ⑤ Campe (1809, Bd. 3, S. 546): (Umgangsspr.) Hinter dem Ofen sitzen oder liegen, auch uneigentlich, müßig zu Hause bleiben, aus Trägheit und Bequemlichkeit nicht gern das Haus verlassen, auswärts thätig sein, wofür man mit noch verächtlicherem Nebenbegriffe sagt: hinter dem Ofen hocken.
- ⑥ W. Hoffmann (1857, Bd. 4, S. 272): hinter dem Ofen sitzen, d. h. bildl. immer im Winter in der Stube bleiben(.)
- ⑦ Grimm (1886, Bd. 7, S. 1157): die meisten redewendungen knüpfen sich an die stelle hinter dem ofen, die sog. hölle, als schlupfwinkel oder als platz für träge, faule, stubenhocker und geringschätzig behandelte leute(.)
- ⑧ Sanders (1876, Bd 2, S. 463): Hinterm Ofen [s. Hölle] sitzen, hocken liegen u.s.w., ... Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen. (例文として、我々が問題にしている一文が掲載されている。)

これらの辞書の中でも詳しく説明している Campe の辞典に従うと、Hinter dem Ofen sitzen という表現は、庶民が使用する俗語ではあるが、1) 現実に「竈の後ろに座る」、2) 転義的・比喩的に「怠惰と心地よさから家を出て、外で働こうとしないで、家に引きこもっている」、という意味であり、より一層軽蔑の意味を強めると、„hinter dem Ofen hocken“, という言い回しを用いる。そして、Sanders の辞典では、我々が問題にしている KHM 106

の „Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen“ が例文として掲載されているが, „in einigen Fällen, ein heimliches Plätzchen, versteckter Winkel“, 即ち, Raum hinterm Ofen とは, 「秘密の片隅, 隅の隠れ場所」であるという指示が付いているので, この用法は「現実に竈の後ろに座る」意味ではなく, 転義的用法であり, KHM 106 の内容から解釈すれば, 「老いた粉屋」は製粉業を弟子に譲って, 自分の老後の世話をさせたい, と言うのであるから, 長年家業に勤しんできた老人のこの発言は実に健全であり, 決して自己蔑視ではない。すると, 問題の一文は, 「現実に竈の後ろに座る」という意味ではなく, Ofen の後ろの空間は転義的用法として「秘密の隠れ場所」と解釈されるべきである。事実, Grimm と Sanders の説明では, 「竈の後ろの場所」(die Stelle hinter dem Ofen) とは, 「いわゆる Hölle といわれる場所」である, と言っているのです, 問題の一文は, „Ich bin alt und will mich hinter die Hölle setzen.“ と言い換えることができる。そこで, 次に我々はこの Hölle を辞書で確認したい。

先ず, 比較的新しい現代ドイツ語辞典:

- ⑨ Klappenbach (Bd. 3, S. 1888): landisch. veraltend enger Raum zwischen Wand und Ofen: wie in allen sächsischen Bauernstuben fand er sich (der Raum hinter dem Ofen) durch ein etwa drei Fuß hohes Podium ausgefüllt, welche „die Hölle“ genannt wurde(.)
- ⑩ Brockhaus-Wahrig (Bd. 3, S. 639): (süddt.) Raum zwischen Ofen und Wand.
- ⑪ Duden II (Bd. 4, S. 1628): (landisch.) in alten (Bauern) häusern (mit einer Sitzbank versehener) enger Raum zwischen Kachelofen und Wand.

Klappenbach の辞典では, 先ず Hölle は „enger Raum zwischen Wand und Ofen“ であり, それは der Raum hinter dem Ofen である, と言い換えているので, これ以上の説明は不要であるが, Duden II の辞典の「ベンチを設えたタイル張りの竈と壁との間の狭い空間」という説明を読むと, それは, 「狭い」とはいえ, ベンチを置くことができる程の広さがある「空間」である事が明らかになる。換言すれば, その空間はそもそも竈の後ろにベンチを置く事を目的として設置された空間であるから, 当然「火傷をしないで」, 「竈の後ろに座る」事は現実にできる訳である。それ故, 邦訳に際して訳者が,

Grimm,あるいは、Sandersのどちらかのドイツ語辞典を参照し、上記の三冊のいずれかの現代ドイツ語辞典をひもとけば、Hölleが「竈と壁の間にある狭い空間」(mit einer Sitzbank versehener, enger Raum zwischen Wand und Ofen)である事を十分に理解し、正しい解釈に到達して、「竈と壁の間にあるベンチに座りたい」とでも邦訳する事ができたはずである。しかし、„sich hinter den Ofen setzen“という字面は、GrimmやSandersのドイツ語辞典を参照する必要性を感じさせないほど表面的には「単純」に見えるので、「竈の後ろにベンチを置く事ができるほどの狭い空間」(Hölle)の存在に関する知識を殆ど持っていない日本の翻訳者は「誤解・誤読・誤訳」の落とし穴に陥ってしまったのである。

次にKHMの成立時代を考慮して、少し古い辞書を調べたい。その際に、Adelungの辞典の最も明解な説明に従えば、本来Helleが正しい綴りであり、Hölleは誤った綴りになる。又、同一辞典内でHelleとHölleの両語を見出し語としている場合も多くあるので、両者を列挙しておく。

- ⑫ Oertel: Helle, hinter dem Ofen, zwischen Ofen und Wand, Hellofen, insg (mein) Höllofen(.) (Bd. 2-1, S. 218)  
Hölle, der schmale und dunkle Raum zwischen den Ofen und der Wand, in den Häusern gemeiner Leute(.) (Bd. 2-1, S. 241)
- ⑬ Heinsius: Helle, ein versteckter Raum, Ort, besonders der meist versteckte Raum zwischen dem Ofen und der Wand (bei Einigen irriger Weise Hölle). (Bd.2, S. 218)  
Hölle, der schmale und gewöhnlich dunkle Raum zwischen dem Stubenofen und der Wand (gewöhnlicher Helle). (Bd. 2, S. 241)
- ⑭ P. F. L. Hoffmann: Helle, landschaftlich. der Raum zwischen dem Ofen und der Wand. (S. 41)
- ⑮ W. Hoffmann: Helle, landschaftlich der Raum zwischen dem Ofen und der Wand.  
Hölle, landschaftlich. der Raum hinter dem Ofen bis zur Wand u.s.w., auch Helle genannt(.) (Bd. 3, S. 216)
- ⑯ Ditscheimer-Wessely: Hölle, der Raum zwischen der Wand und dem Ofen im Zimmer. (S. 279)

- ⑰ Adelung: Helle, im gemeinen Leben, besonders Niedersachsens, ein verborgener, geheimer Ort. Am häufigsten ist es von dem meisten Theils etwa verborgenen Raume zwischen dem Ofen und der Wand, in den Häusern der gemeinen Leute üblich, wo es aus Mißverständnis oft Hölle geschrieben und gesprochen wird. (Bd. 2, S. 1100)
- Hölle, Eigentlich, in welcher Bedeutung es noch hin und wieder im gemeinen Leben üblich ist. Besonders führet diesen Namen der gemeinlich enge und dunkle Raum zwischen dem Ofen und der Wand, in den Häusern gemeiner Leute, besonders auf dem Lande, wo es aber gemeinlich Helle lautet. Lag ich müd schlafend in der Hell, Hans Sachs. (Bd. 2, S. 1264-65)
- ⑱ Campe: Helle, von hehlen, ein abgeschiedener, versteckter Raum, Ort. So wird besonders der meist versteckte oder verhängte Raum zwischen dem Ofen und der Wand, die Helle genannt, welches irriger Weise häufig Hölle gesprochen und geschrieben wird. In der Helle oder hinter der Helle stecken. „Lag ich müd schlafend in der Hell.“ H. Sachs. (Bd. 2, S. 614)
- Hölle, (Umgangsspr.) Der schmale und gewöhnlich dunkle Raum zwischen dem Ofen und der Wand in den Stuben gemeiner Leute, besonders auf dem Lande, in welcher Bedeutung es gewöhnlicher Helle lautet. (Bd. 2, S. 771)
- ⑲ Sanders: Hölle, der Raum zwischen dem Ofen und der Wand; ein sehr beliebter Ort zum Schlafen und Ausruhen. (Bd. 2-1, S.781)
- ⑳ Grimm; hölle, der enge raum hinter dem ofen zwischen diesem und der wand; ... es ist vielleicht nichts als eine volkswitzige übertragung der bedeutung 1 (den ort der qual für die nach dem tode verdammten) auf einen engen und heissen raum: der ander lag noch hinder dem ofen in der hell und mocht vor faulkeit nit aufstun. (Bd. 4-2, S. 1748)
- ㉑ Weigand-Hirt: Hölle, der enge Raum zwischen dem Ofen und der Wand. (Bd. 1, S. 884)

以上 10 冊の辞典の説明をまとめれば、次のようになる。

1) Hölle は本来 Helle であった, そして, ニーダーザクセン地方の方言であり, 1800 年頃でも庶民の家には設えられていた「竈と壁の間にある細長く, 暗く, 外からは見えない空間」を指し示す。P. F. L. Hoffmann はこ

の立場を堅持し、Hölle に関しては「地獄」の用法の説明のみである。

2) Adelong と Campe におけるハンス・ザックスの „Lag ich müd schlafend in der Hell.“ (私は、疲れていたもので、竈の後ろと壁の間にある細長く、暗い隠れ場所に横になって寝た。) という例文と、Grimm における „der ander lag noch hinder dem ofen in der hell und mocht vor faulkeit nit aufstos“ (もう一人の者はまだ竈の後ろにある隠れ場所に横になっていて、怠け癖から一向に起きようとしなかった。) という例文から、Hölle は、他人の目を憚らずに、「ゆっくり寝たり、休息したりするのに都合が良い場所」である、と言える。

3) この見解の正当性を保証しているのが、Hölle は「睡眠と休息に好まれる場所」(ein sehr beliebter Ort zum Schlafen und Ausruhen) である、という Sanders の説明になる。

#### III-4

それでは、「自分専用の寝室などはほとんどの場合存在せず、皆が寄り添って竈の傍らや、時には床の上で寝ていた」<sup>23)</sup> 時代において、「竈と壁の間の」Hölle と呼ばれる「睡眠と休息に好まれる場所」は貴重な空間であったであろう。そこで、更に詳しく調べたい。

既に、III-3 の①で引用した Duden II は、Hölle とは、「(方言で)、昔の(農)家に見られたところの、(Sitzbank が備えられた) タイル張りのストーブと壁との間の狭い空間」である、と説明していたが、Ofen の後ろの Hölle は、「狭い」とはいえ、人が一人横になることができる程の大きさのベンチを設置する事ができた。Heyne の辞典<sup>24)</sup> では、先ず、「私は、夕方になると、竈の後ろにあるベンチの上に身を横たえた」(ich ... lege, wann der abend kommt, mich hintern ofen auf die bank) という例文を挙げ、その5行先で、„Ofenbank“ とは、「ストーブの横または後ろに設えられたベンチ」(Bank neben oder hinter dem Ofen) である、と説明している。そして、そのベンチの大きさを窺わせる次の例文を続けて掲載している。「主婦は賓客のために竈の後ろのベンチの上に寝具を整えた。」(die hausfrau <machte> ihrem vornehmen gast ... auf der ofenbank ein bett zurecht.) 即ち、Ofenbank は、現在の視点に立脚した Duden II の説明に従えば、「腰掛座席」(Sitzbank, Bank als Sitzmöble) よりも大きく、その上に賓客用のベッドを整える事ができる程の大きさのベンチであった。それ故、Hölle は、その様な大きさ

の Ofenbank の設置が可能な小空間である、と理解するべきである。又、Trübner の „Deutsches Wörterbuch“ において、Hölle は「竈と壁の間の空間、即ち、狭い隠れ場所」(Raum zwischen Ofen und Wand, enger Verschlag)<sup>25)</sup> である、と説明されている。ところで、„Verschlag“ は何らかの仕切りがある事を含む言葉であるが、この場合、既に提示した Gardner のイラストから理解できる大きさの竈が背後にある Hölle を他人の目から遮る「仕切り」(Verschlag)、いわば、「屏風」或いは「衝立」の働きをしている、と考えることができ、それ故、Hölle には「仕切られた小部屋」、「仕切り小部屋」、即ち、他人の目を気にしないで済む「隠れ場所」(die Verbergende)<sup>26)</sup> の意味も含まれてもいる。

ところで、Grimm の『ドイツ語辞典』では、Ofenbank は、「竈に接して左右に、または背後に設えられたベンチ, höllbank と比較せよ」(eine bank an oder hinter dem ofen <vergl.> höllbank)<sup>27)</sup> と説明されている、しかし、見出し語としての höllbank は見あたらなかった。ところが、Hölle は次のように説明されている。

volksmässig ist dies hölle auch jetzt hinter dem ofen, wo gewöhnlich die holzspäne getrocknet und aufbewahrt werden. ... s. auch höllbank.<sup>28)</sup>

そこで、当該箇所を見ると、höllbank は hellbank であると説明され、「彼は…不機嫌に竈と壁の間の仕切られた隠れ場所に置かれたベンチの上へ身を投げ出した」(er ... warf sich miszmutig auf die höllbank.)<sup>29)</sup> という例文が掲載されている。更に、Weigand-Hirt の辞典では、単明瞭に、Höllbank は Ofenbank であり、Hellbank とも、と説明されている。<sup>30)</sup> 又、K. Faulmann の語源辞典において Hellbank は、„Ofenbank; erst n (euhochdeutsch)<sup>30a)</sup>, im 15. Jahrh. hell <enger heimlicher Raum zwischen Ofen und Wand><sup>31)</sup>, と説明されている。更に、Walde は „Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprache“ において、「初期新高ドイツ語の helle, hölle は『竈の背後にある竈と壁の間の狭い空間』であり、hellbank は „Ofenbank“ である」(enger Raum hinter dem Ofen zwischen diesem und der Wand, hellbank <Ofenbank>)<sup>32)</sup> と説明している。以上の多数の辞典の説明によって、Hölle (Helle), Ofenbank, Höllbank (Hellbank) の三次元的位置関係は明らかになった、と考える。

### III-5

以上の論考で、明らかになった ein dunkler Raum hinter dem Ofen, すなわち, Hölle (Helle), そこに設置されている Ofenbank, 或いは, Höllbank (Hellbank) の機能を更に詳しく検討したい。

1) 上で引用した Heyne の辞典で、「女主人は、賓客ために竈の後ろの狭い空間に設置されたベンチの上に寝具を整えた」(die hausfrau <macht> ihrem vornehmen gast ... auf der ofenbank ein bett zurecht.) という例文を引用していたが、本来、暖かい竈の周辺は「寝場所」に適していた。Hoffmann-Krayer の編纂になる『ドイツ迷信辞典』では次のように言っている。

... die Schlafstelle ... (befindet) sich im slavischen Osten noch heute oft auf dem Ofen, aber auch in vielen deutschen Gebieten noch häufig hinter dem Ofen, „in der Höll“, auf der Ofenbank oder in einem Raum ober dem Ofen (.)<sup>33)</sup>

次に、Faust の Studierzimmer の場面において扱われている Ofen を検討したい。「市門の前」の散歩から、なついで付いて来たプードルを「書斎」へ連れて帰った Faust が、「荒々しい衝動が眠り込み、人間への愛が湧き上がり、神の愛が満ちあふれる」<sup>34)</sup> 神聖な思いに浸っていると、そのプードルが走り回ったり、敷居の臭いを嗅ぎまわったり、Faust の邪魔になり始めたので、Faust はプードルに向かって次のように言う。

Lage dich hinter den Ofen nieder,  
Mein bestes Kissen geb' ich dir.<sup>35)</sup>  
竈の後ろの仕切り小部屋に伏せておれ、  
俺の上等で大きな座布団をお前に提供しようではないか。

確認する事ができた邦訳において、「ストーブの影」等の文言上の工夫はあるが、Hölle, 即ち, ein warmer dunkler Raum „hinter dem Ofen“ に関する注はなく、ましてや、Ofenbank や Höllbank の認識の訳出も感じられず、「暖炉の後ろに座る」という文法的にのみ正しい邦訳が行われているに過ぎない。<sup>36)</sup> しかし、Hans Arens は „Kommentar zu Goethes Faust I“ において、『ド

イツ迷信辞典』を引用して、次のように言っている。

Hierzu ist zu bemerken, daß der Raum hinter dem Ofen frühneuhochdeutsch und noch landschaftlich „die Höll(e)“ heißt und der Ofen selbst im Volksglauben „Sitz verschiedener Geister und Dämonen und seit früher Zeit ein Ort des Zaubers“ war.<sup>37)</sup>

現代のドイツ語圏の研究者にとってさえもこのような注解が必要とされるのにもかかわらず、Raum „hinter dem Ofen“ や „die Hölle“ を生活文化の中に持たない、それ故、その文化的内容を全く理解する事ができない日本の翻訳者達が注解も付けずに、文法的にのみ正しい邦訳を提示している事は、ここで誤読、誤解、誤訳が行われている事を証明している。<sup>38)</sup>

2) Raum „hinter dem Ofen“, „die Hölle“ は、肩書きに縛られた公の場所とは正反対の、安らぎや休息の場所である。Dülmen は『近世文化と日常生活』において次のように言っている。

(In dem mit Leder überzogenen Grosvaterstuhl ruht <sup>39)</sup> der Hausvater, wenn er nicht hinter dem Ofen, nach Landessprache in der Hölle, liegt.<sup>40)</sup>  
皮張りのウイングチェアに家長は、竈の後ろの狭い隠れ場所、お国言葉で「ヘレ」に置かれたベンチで横になってリラックスしていない時に、微動だにしないで座って威厳を保っている。

更に Dülmen は、数頁先においてこの「皮張りのウイングチェア」がいかなる代物か、説明している。

Sie (Stühle mit Lehnen) waren ursprünglich nur für den Hausvater vorgesehen — zur Hervorhebung seiner patriarchalischen Stellung —, waren aber lange alles andere als bequem. Dem menschlichen Körper angepaßte Sitze gab es erste 19. Jahrhundert.<sup>41)</sup>

このウイングチェアは、自分の家長としての地位を強調するために、家長のみが座る事を目的としていた、しかし、座り心地の良さなどは長いこと度外視されてきた。人間の体に合う座面が世に現れて来るの

はやっと 19 世紀になってからの事である。

即ち, „in dem mit Leder überzogenen Grosvaterstuhl ruhen“ は, 人間工学など無視し, 「家長としての地位を強調」する事のみを目的とした, 「威圧的なウイングチェアに微動だにしないで座って威厳を保つ」「家長」の表向きの姿を示し, 反対に, „hinter dem Ofen, nach Landessprache in der Hölle, liegen“ は, 一部屋で複数人が共同で生活し, 互いに見張り, 見張られ, 一切が筒抜け状態で, プライベートが全く無いに等しかった当時において, 竈によって人目が遮られた隠れ小部屋で気兼ねの必要もなく, ゆったりと横になり, 自由に手足を伸ばして休む事ができる, それ故, 一種のプライベート的要素を享受する内向きの姿を示している。

### III-6

現在, 目にする機会が稀になってしまった日本古来の背の低い竈 (Herd) はその背面を壁面に接して設置されているか, あるいは, 防火対策として極わずかに隙間を置いて設置されている。しかし, 後者の場合, 背の低い竈の背後のわずかな隙間は, そこに人が横になるベンチを設置する事ができるほどの広い空間ではない。また, 日本の一般家庭では目にする事が珍しい「暖炉」(Kamin) はその背面を全面的に壁面に密着させて設置されているか, 壁面に組み込まれ, 壁面の一部であるかの如く設置されている。そして, 日本で使用される個室用のストーブは軽く, 可動式であり, 部屋の何処にでも置くことが可能で, そもそも, その背後に空間が存在する, という概念は成立しない。この場合存在するのは, 部屋という空間のみである。ところが, 既に明らかにされたように, Ofen の背後と壁の間には, Ofenbank, 或いは, Höllbank を設えることができる空間 (Hölle) が存在する。そこで, 彼我の大きな差異を超えて Hölle を理解するために, その成立を明らかにしたい。そこで, 語源辞典を参照したい。

- ① Duden I, Bd.7 (S. 270): Mit 'Hölle' im Sinne von „Ort der Verdammnis“ ist identisch 'Hölle' als veraltet und mundartlich Bezeichnung eines Raumes, in dem zwischen Ofen und Wand(.)
- ② Paul (S. 316): Frühneuhochdeutsch und noch landschaftlich ist Hölle

Bezeichnung für den Raum zwischen Ofen und Wand, daher Höllbank(.)

- ③ Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 20. Aufl. Berlin 1967. S. 314f.

... Hölle urspr. ‘Bergende’. Geht zuletzt auf die Vorstellung ‘steinern’ zurück, vgl. anord. hella ‘Felsplatte, Grabplatte’. Entspr. in Hellbank ‘Ofenbank’(.)

- ④ Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 1. Aufl. Straßburg 1883. S. 123.

Hellbank: Höllbank ‘Ofenbank’ zu älter nhd. Helle, Hölle ‘der enge Raum, Winkel hinter dem Ofen zwischen Ofen und Wand; das Wort begegnet zuerst gegen das Ende des 15. Jahrhunderts, reicht aber höher hinauf (.) ... Die nhd. Form beruht auf volkstümlicher Anlehnung an Hölle, mit dem unser Hell ‘Winkel’ zu Wz. hel ‘verhüllen, verbergen’ gehört.

Kluge の初版では, „Ofen“ が文献上登場するのは 15 世紀であるが, 話し言葉としてはそれを遙かに遡る, と言っているので, 次に中世ドイツ語辞典を参照したい。

- ⑤ Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. 3 Bde. Leipzig 1872. S. 1232.

helle: enger raum zwischen dem ofen u, der wand.

- ⑥ 古賀允洋: 中高ドイツ語辞典 大学書林 2011. 231 頁。

煖炉と壁の間の狭い空間 (enger Raum zwischen dem Ofen und der Wand)。

ここで注意すべき事は, Kluge の語源辞典の初版と 20 版を比較すると, Hölle に関する記述が, 現代に近づけば近づくほど, 遠慮がちに成っている, という事である。恐らく, Hölle は現代ドイツの生活圏からは見えかかっている言葉なのであろう。もしそうであるならば, 邦訳に際して語注が不可欠である, 或いは, 内容を加味した (説明的) 邦訳が必要である。

ところで, 以上の語源辞典の説明は既知なので, Hölle の成立の解明にあまり効果的ではない。しかし, Trübner のドイツ語辞典に一つのヒントがある。

Der Ofen ragte weit ins Zimmer und ließ zwischen seiner Rückseite und der Wand einen Raum, oft H ö l l e genannt.<sup>42)</sup>

竈は（壁から離れて）ずっと部屋の中へ突き出ていたので、その背面と壁の間に、しばしば「ヘレ」と呼ばれる空間が存在した。

竈は「かなり部屋の中へ突き出ていた」、即ち、竈は壁に接して設置されてはいなかった、むしろ壁から「かなり」(weit) 離れた場所に設置され、部屋の中に突き出ていた。それ故、「ヘレ」は寝台になる大きさのベンチを置くことができる「それなりの広さのある」空間であったのだ。ところで、ここで注意する事は、過去形で書かれている時代が「15世紀」以降であり、KHMの時代背景となりうる、という事である。即ち、KHM 106で扱われている、連れ合いも子供もない「貧しい粉ひき職人」は3人の見習いと共同生活をしていたのであるが、当時のこのような共同生活について、Dülmen は興味深い報告をしている。

Die meisten Menschen des 16. Jahrhunderts und auch später lebten in kleinen Häusern, die mehr Hütten als Wohnhäusern glichen; ... (sie) hausten noch zusammen mit dem Vieh nicht nur unter einem Dach, sondern oft in einem Raum. Den Mittelpunkt bildete die Feuerstelle. Allzuoft zog der Qualm unmittelbar durch Tür oder Fenster hinaus. Eigene Schlafkammern gab es kaum, man schlief zusammen dicht bei der Feuerstelle, oft auf dem Boden (.)<sup>43)</sup>

16世紀、また、それ以降の時代においてもたいていの人々は、居住家屋などというよりもあばら屋と言うにふさわしい小屋に住んでいた。・・・(かれらは)、更に家畜と一緒に一つ屋根の下どころか、しばしば同じ部屋で生活した。家の中心を形成していたのは竈であった。全く普通の事ではあったが、炉から舞い上がる煙は直接扉や窓から外へ出て行った。自分専用の寝室はほとんどの場合存在せず、皆が寄り添って竈の傍らや、時には土間の床の上で寝ていた。

ところで、上で引用した Dülmen の報告の絵画的表現とも考えることができる作品がある。それは、Hermann Dauer (1870-1925) が1902年に描いた石版画 „Frelsdorf - Inneres eines niedersächsischen Bauernhauses“ で、直火

が燃えている炉がある土間が表現されている。自在につるされた大きな鍋が掛かり、椅子に座った女性らしき人物が手をかざして暖を取っている。



彼女の背後の壁際には調理台らしき物が置かれている。土間の右側の仕切り小屋には牛の顔が覗いている。左側にも同じような仕切られた家畜小屋があると思われるが、描き込まれていない。その代わりに、その存在を暗示する雌鳥一羽とひよこが三羽描かれている。この Dauer の石版画は、北ドイツの農家の内部の様子を我々の脳裏に焼き付けてくれる。二人のおかげで今や我々は当時の生活状況を明確に理解する事ができる。即ち、竈 (Herd) は、部屋の中心にあるからこそ、「窓はたいてい非常に小さく」<sup>44)</sup> 暗い部屋全体に灯りを届け、暖を送り、竈の周りで共同生活者は温かい食事を摂り、暖かく寝ることができたのである。即ち、竈は暖房と照明と調理と三役を果たし、なおかつ共同生活者の心の拠り所、家庭生活の精神的中心であったのだ。それ故、竈は部屋の中心にあらねばならなかった。しかし、ガスも電気も石油もない時代において、「貧しい」人々は、当時唯一の照明とも言うべき「蠟燭はとても高価であった」<sup>45)</sup> ので、使用できなかった。唯一使用する事ができたのは薪であった。しかし、粘土で固めた土間 (Flett) に石を敷き、<sup>46)</sup> 周囲を石で囲んだ炉 (Feuerstelle) で薪を燃やすと、直火から舞い上がる「台所には煙を排出する設備がない」(Küche, die keinen Rauchfang hat)<sup>47)</sup> のであるから、部屋の中でたき火をしているのと同じで、部屋中が、家中が、裸火の煙で燻されることになる。しかも、唯一の排煙設備は小さな窓と土間の扉であった。このような家を

„Rauchhaus“<sup>(48)</sup> と言い、また、北ドイツの土地柄に因んで „Hallenhaus“<sup>(49)</sup> とも言うが、裸火の煙に燻される生活環境は健康に悪く、また、火事を誘引する危険性も高いので、排煙設備の設置のために、「(20世紀)以後、石で囲まれた竈 (Herd) は土間の壁際へ移動していった。」<sup>(50)</sup> すると、„Hölle“ は、竈 (Herd) が土間の壁際へ移される途上で、暫定的に作り出されていた一種のプレ個室なる「仕切り小部屋」であった、と言える。

### III-7

KHM 106 において Hölle に備えられた Höllbank に座る人物は、その冒頭で、„Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen“, と言っているのであるから、「老人」になる。そこで、この確証を探すと、それは既に引用された『ドイツ迷信辞典』の次の説明にある。

Ofenbank. Sie ist der behaglichste Platz der Wohnung, der Sitz der Alten und Leibgedinger und findet sich in verschiedenen Formen als Mauernische („Hölle“), Mauerbank und auch Ofensessel („Sidel“). Ihre enge Verbindung mit den alten Leuten und mit dem Ofen macht sie auch zum Sitz der Ahnenseelen(.)<sup>(51)</sup>

Ofenbank は、住居の中でも最も快適な場所であり、老人や隠居した人が座る場所であり、Mauernische („Hölle“), Mauerbank, Ofensessel („Sidel“) 等とも言い換えられている。老人達と竈の密接な結びつきが Ofenbank を祖霊達の居場所とも定めた。

この説明に従えば、Hölle に設えられた Höllbank (Ofenbank) に座るのに相応しい人物は、Heyne の辞書で言及されていた「賓客」<sup>(52)</sup> を除いて、通常は先ず「隠居した老人達」(Alten und Leibgedinger) である。

又、Trübner のドイツ語辞典も同じ見解を、既に上で引用した説明に続けて、次のように述べている。

Der Ofen ragte weit ins Zimmer und ließ zwischen seiner Rückseite und der Wand einen Raum, oft H ö l l e genannt. Er war beliebt wegen seiner Wärme; hier saßen die alten Leute, die nichts mehr zu tun hatten(.) ... ein

schwäbischer Landsknecht erklärt 1523: „Ich wölt Arbayt fliehen und den Solt hinter den Ofen verdienen.“<sup>(53)</sup>

竈は（壁から離れて）ずっと部屋の中へ突き出ていたので、その背面と壁の間に、しばしば「ヘレ」と呼ばれる空間が存在した。それは、暖かさ故に好まれた。この場所に座ったのは、もう仕事をしない老人達であった。・・・あるシュワーベンの傭兵は 1523 年に次のように説明した。「わしは辛い兵役の仕事を逃れて、『ヘレ』、即ち、竈の後ろの仕切り小部屋の特等席に座って、軍人恩給を頂きたいものだ。」

通常、「もう仕事をしない老人」を「隠居」と言い、「軍人恩給を受給する者」を「退役軍人」という。したがって、『ドイツ迷信辞典』と Trübner の『ドイツ語辞典』の二冊の辞典の説明から、今や我々は自信を持って、Hölle に設えられた Höllbank (Ofenbank) に座るのに一番相応しい人物は「隠居した老人」である、と結論づける事ができる。

### III-8

最後に残された問題は、„sich hinter den Ofen setzen“ は本当に „auf die Ofenbank oder den Höllbank sitzen“ を表現することができるのか、という事である。

そこで注目したいのは、上で引用した『ドイツ迷信辞典』において、Mauernische („Hölle“), Mauerbank, Ofensessel („Sidel“) など、Ofenbank の言い換えが掲載されているが、その中でも „Hölle“ が北ドイツの田舎言葉である事は、既に引用された複数の辞典において言及されていた、それに対して „Sidel“ は初出であるので、Grimm のドイツ語辞典を参照すると、„Siedel“ を見よ (Bd. 10-1, S. 757), とあるので、当該箇所を見ると、„sitz, stuhl, bank, wohnung“, と説明されているが (Bd. 10-1, S. 860), 使用される地域に関する説明は記載されていない。そこで、Adelung の辞書を参照すると、„Siedel“ は更に詳しく次のように説明されている。

ein im Hochdeutschen veraltetes Hauptwort. Ein Ort, wo man sitzt, worauf man sitzt, der Sitz; besonders ein Stuhl, Sessel, Sattel. In diesem Verstande ist es noch in einigen Provinzen Ober-Deutschlandes für einen jeden Sitz

oder Stuhl üblich. (Bd. 4, S. 88)

即ち, „Hölle“ は北ドイツの方言であるが, „Sidel“ は南ドイツの方言である。そこで, Schmeller の編纂になる „Bayerisches Wörterbuch“ を参照してみると, das Sidel は Bank であると説明され, „Ein sidel ist ein banc.“ という例文が掲載されている。<sup>54)</sup> 更に同辞典で „Ofenbank“ を調べてみると, „Bank am Ofen in Bauernhäusern.“, と説明され, <sup>55)</sup> „Hell“ を調べてみると次のように説明されている。

Die Hell, ... der enge Raum, den an einem Winkel der Stube der Ofen mit der Wand bildet (.) ... (Die Helle bezeichnet) ... sowohl Hölle ..., als auch den engen Raum zwischen dem Ofen und der Wand(.) Wahrscheinlich übrigst dieses Hell ... von einer frühern, jetzt noch südländischen Einrichtung, wo die Küche zugleich Stube war, ohne Ofen. (Bd. 1/2, S. 1080)

„Hell“ は, . . . 部屋の隅に竈が壁と共に形成する狭い空間である。 . . . „Hell“ は, . . . 地獄 (Hölle) と同時に . . . 又, 竈と壁の間の狭い空間を意味する。恐らくこの事が原因で, 昔は何処にでも見られたが, 現在では南ドイツの田舎に残されている竈がない台所が同時に居室であった家の作りから „Hell“ が残ったのであろう。

Schmeller の辞典の説明に依れば, 南ドイツの住宅の構造から, „Bayerisches Wörterbuch“ が編纂された 1939 年に到ってもなお煮炊きと暖房を兼ねた竈は土間に設えられ, 竈の背後に „Hell“ は残存していた, という事である。そして, 更にこの先を読むと, 次のように説明されている。

Sich in die Hell setzen, legen, d. h. auf eine in diesem Raum angebrachte Bank u (s.w.). (Bd. 1/2, S. 1080)

この説明に従えば, der Raum hinterm Ofen が die Hell であるのであるから, 我々が問題としてきた KHM 106 の „sich hinter den Ofen setzen“ は, 「Hell の中に備え付けられているベンチに座る」 (sich auf eine in der Hell angebrachte Bank setzen), という事を意味する, そして, この Hellbank の

Stammgast が「退職した老人」になる、と今や確信を持って言える。

#### IV

以上の論考から結論として次のように言う事ができる。

1) Ofen は、本来部屋の中央にあって、調理、暖房、照明の三つの働きを担っていたが、それぞれの働きが分化し、排煙設備の取り付けが容易な部屋の隅へと次第に移動し、最終的には、部屋の壁面を火災から守る „Take“ (mhd. tacke: decke)、フランス語の「(暖炉の) 炉背、背壁 = contrecœur (炉背を覆う鑄鉄製の) 反射版」<sup>56)</sup> を意味する „taque“ が製造されて、初めて壁面に密着させる事が、更に、暖炉 (Kamin) に特化して壁面の中へ埋め込む事ができるようになり、現在の形態になった。その過程で、竈を壁面に密着させず、竈の背面と壁面との間に「仕切り小部屋の空間」が残存した状態が 19 世紀末まで、特に北ドイツや南ドイツの田舎においては 20 世紀前半まで続いた。

2) この、「竈」と「壁」の間の「仕切り小部屋の空間」(kleiner Raum zwischen dem Ofen und der Wand) は北ドイツでは本来 „Helle“, 現代では „Hölle“ と呼ばれ、南ドイツでは „Sidel“ と呼ばれていた。

3) この „Helle“ は、人間が横になることができる、或いは、ベッドさえもその上に設える事ができる大きさの „Hell(en)bank“, „Höll(en)bank“, または、„Ofenbank“ と呼ばれるベンチを置く事ができる程の広さであった。唯し、„Ofenbank“ は、Ofen の前後左右に置かれているベンチまで表現することができるので、KHM 106 の時代背景、製粉業者の「貧しい」経済状況、水車小屋は通常村はずれ、即ち、田舎という条件を勘案すると、„Hell(en)bank“ が相応しい、と判断される。

4) この „Helle“ は暖かく、大きな竈によって人目が遮られるので、居心地の良い、人気の場所であった。それ故に、そこに座るのは主に「隠居した老人」であった。別言すれば、„Helle“ という Stammtisch の Stammgast は「隠居老人」であったのだ。

5) ここで我々の KHM 106 の問題の箇所を見直せば、„Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen(.) ... (Einem von den) drei Müllerburschen will ich die Mühle geben, und er soll mich dafür bis an meinen Tod verpflegen.“、即ち、自分は年を取ったので、家督を弟子の一人に譲って、その代わりに自分の

今後の生活の面倒を天に召されるまで見てもらう、と言っているのであるから、ここには「隠居する」という意志が明確に表現されている。

6) すると、„Ich bin alt und will mich hinter den Ofen setzen“ は、「わしはもう年だから、（竈のうしろの）仕切り小部屋の特等席に座って楽隠居の身になりたい」、とでも邦訳されるのが最善である、と考えるが、これではあまりにも説明的であり過ぎるので、注を付けることを前提にして、「楽隠居の身になりたい」、日本の文化に引き寄せれば、落語の『茶の湯』を参考にして、「隠居して茶の湯でも楽しみたい」、と邦訳しても良いであろう。また、「隠居する」も良いが、「文学性」に欠け、単刀直入過ぎて味気ない。

他方、「竈の後ろに座る」という直訳的邦訳をそのまま使用する事には「狭い仕切り小部屋」の空間性を示す „Hell(e)“ の理解が欠如しているので、誤訳としか言い得ない。この判断に基づくと、次のようになる。

全くの誤読・誤解・語訳：金田訳、二種類の植田訳、Hunt の英訳、International Collectors Library 出版の英訳。

正解：関／川端共訳、Chancellor 出版の英訳、web サイトから取得したフランス語訳、Grimstories.com から採取したスペイン語訳。

„Hell(e)“ の誤訳と隠居（のんびりする）を結びつけた折衷的訳出：野村訳、池田訳、橋本／天沼共訳、Owens の英訳、Ebooks libres gratuits 出版のフランス語訳。

ところで、原文では „Ofen“ が用いられているが、邦訳だけに限ると、「ストーブ」と訳出したのは、金田、野村の二人、「煖炉」と訳出したのが植田（二種類）、池田、橋本／天沼（共訳）であるが、KHM の素材の成立時代、田舎、貧乏を考慮すれば、高価な「炉背を覆う鑄鉄製の反射版」である „Take“ を購入する事ができなかった「老いた粉ひき」には、調理、暖房、照明の三つの機能を独立させる経済的ゆとりはなかった。即ち、蠟燭は高価であったし、煖炉（Kamin）は更に財産とも言うべき高価な調度品であった、まして、鑄造製やタイル張りの、個人用居室ストーブなど所有できなかった。その結果、この三つの機能を兼ね備えさせた石で囲われた「直火の竈」が設えられているのみであった。それ故、「ストーブ」も「煖炉」も時代考

証を無視した誤解・誤訳と言わざるを得ない。即ち、邦訳に関して言えば、無味乾燥な関／川端訳以外は総て誤解・誤訳になる。

7) 我々のテキストの誤解・誤訳は, Raum „hinter dem Ofen“ が „Hell(e)“, 或いは, „Hölle“である, という説明に出会うか否かに懸かっていた。そのためには, Grimm か Sanders のドイツ語辞典を読み, 説明文中の Hölle に気づき, 比較的古い辞書で追跡すれば, ein Raum hinter dem Ofen を Helle, 或いは, Hölle と言ひ, それが „ein enger Raum zwischen dem Ofen und der Wand“ である事を認識し, そして, Schmeller の編纂になる Beyerisches Wörterbuch の説明 „Sich in die Hell setzen, legen, d. h. auf eine in diesem Raum angebrachte Bank u(s.w.)“ を読めば, 正解に辿り着く事ができた筈である。しかし, Schmeller を参照しなくても, Grimm, あるいは, Sanders の辞典を参照して, 最低限度, „ein Raum hinter dem Ofen“ が Hell(e), 或いは, Höll(e) である, という事に気がさえすれば, 後は, 独和辞典を利用するだけでも正しい理解に到達できたはずである。なぜならば, 以下のごとくに, 多くの独和辞典に „Hölle“ の説明が掲載されているからである。

- ① 木村・相良独和辞典 博文館 1940.; 博友社 1978.  
Hölle: 『方』(md.) 隠れ場所; ストープと壁との間の場所(睡眠・休息に好適)。
- ② 相良大独和辞典 博友社 初版 1958. 15 版 1969.  
Hölle: 『方』(md.) 隠れ場所; ストープと壁との間の場所(睡眠・休息に好適)。
- ③ 佐藤通次: 独和言林 白水社 1968.  
Hölle: <md.> (炉と壁との間) (。)
- ④ 小学館 独和大辞典 小学館 1985.  
Hölle: (南部) 煖炉と壁との間, 隠れ場所。
- ⑤ 研究社 独和中辞典 研究社 1996.  
Hölle: 《方(südd)》 ストープと壁との間の場所 (。)
- ⑥ フロイデ独和辞典 白水社 2003.  
Hölle: 《古》《南ドイツ》 煖炉と壁の間の空間。  
これらの辞典の中でも, Ofen の邦語として「炉」を選択し, 「煖炉」と「ス

トープ」を注意深く避けている『独和言林』が一番適切な説明である事は、以上の論考から自明である。

いずれにせよ、20世紀以前のドイツ文学を読む場合、現代ドイツ語辞典だけでは不十分で、加えて、Grimm や Sanders 等の古い辞書を参照しないと、誤読、誤解、誤訳を犯す事になる場合もある、という事は銘記されて然るべきである。

**本文中で列挙されたドイツ語辞典のリスト(ただし、独和辞典等は含めない):**

Adelung, Johann Christoph: Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart. 4 Bde. 2. Aufl. Leipzig 1798, Nachdruck Hildesheim. 1970.

Agricola, E.: Wörter und Wendungen. Wörterbuch zum deutschen Sprachgebrauch. Leipzig 1973.

Brockhaus-Wahrig. Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden u. Stuttgart 1980-1984. (Brockhaus, Bd 1~6)

Campe, Joachim Heinrich: Wörterbuch der deutschen Sprache. Braunschweig 1807-13, Nachdruck Hildesheim und Tokyo 1969.

Ditscheiner-Wessely: Deutscher Wortschatz. Neue 3. gänzlich umgearbeitete Ausgabe v. Jose. Alois Ditscheiner's „Handwörterbuch der Deutschen Sprache“. Leipzig 1892.

Duden. Stilwörterbuch der deutschen Sprache. Der Große Duden. Bd. 2. 6. Aufl. Mannheim 1971. (= Duden I, Bd. 1~10)

Duden. Etymologie. Herkunftswörterbuch der Deutschen Sprache. Der Große Duden. Bd. 7. Mannheim 1963.

Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 8 Bde. 2. Aufl. Mannheim 1993-95. (= Duden II, Bd. 1~8)

Faulmann, Karl: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache nach eigenen neuen Forschungen. Halle a. S. 1893.

Gört, D.: Langenscheidt. Großwörterbuch. Deutsch als Fremdsprache. Das einsprachige Wörterbuch für alle, die Deutsch lernen. Berlin 2010. (Langenscheidt DaF)

Grimm, Jacob u. Wilhelm: Deutsches Wörterbuch. 16 Bde. Leipzig. 1854-1960.

Heinsius, Theodor : Vollständiges Wörterbuch der deutschen Sprache. 4 Bde. Wien 1840.

Hermann, Ursula: Knaurs großes Wörterbuch der deutschen Sprache. München 1985.

- Heyne, Moriz: Deutsches Wörterbuch. 2 Bde. 2. Aufl. Leipzig 1905-06, Nachdruck Tokyo 1973.
- Hoffmann, P(eter) F(riedrich) L(udwig) : Wörterbuch der deutschen Sprache nach dem Standpunkt ihrer heutigen Ausbildung. Leipzig 1884.
- Hoffmann, Wilhelm: Vollständigste Wörterbuch der deutschen Sprache. 6 Bde. Leipzig 1857-61. (= W. Hoffmann)
- Hoffmann-Krayer, E.: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. 10 Bde. Berlin 1927-42.
- Klappenbach, R. u. Steinitz, W.: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. Berlin 1964-77.
- Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 20. Aufl. Berlin 1967. (= Kluge, 20. Aufl.)
- Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Erste Aufl. Straßburg 1885. (= Kluge, 1. Aufl.)
- Köster, Rudolf: Ullstein. Lexikon der deutschen Sprache. Frankfurt, Berlin 1969.
- Oertel, Christian: Grammatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 3. verbesserte Aufl. München 1934.
- Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. 6. Aufl. Tübingen 1966.
- Sanders, Daniel: Wörterbuch der deutschen Sprache. 4 Bde. Zweiter unveränderter Abdruck. Leipzig 1876, Nachdruck Tokyo 1968.
- Schmeller, Johann Andreas: Bayerisches Wörterbuch. Sonderausgabe. 2 Bde. München 1872, Nachdruck 1985.
- Trübners Deutsches Wörterbuch. Hrsg. v. Alfred Götze. 8 Bde. Berlin 1939-57.
- Walde, Alois: Vergleichendes Wörterbuch der indogermanischen Sprachen. 3Bde. Berlin u. Leipzig 1927-32, Nachdruck 1973.
- Weigand, Fr. L. K.: Deutsches Wörterbuch. 2 Bde. 5. Aufl. Hrsg. v. H. Hirt. Gießen 1909, Nachdruck Tokyo 1973. (= Weigand-Hirt)
- Wolski, W. : Pons Großwörterbuch. Deutsch als Fremdsprache. Stuttgart 2011. (= Pons DaF)

## 注

- 1) 『能の翻訳を考える 文化の翻訳は如何にして可能か 』21世紀COE国際日本学研究叢書8. 編集野上法政大学能学研究所 法政大学国際日本学研究センター 2007.
- 2) 同上 ii頁。
- 3) 同上 iii頁。
- 4) 「謡曲の『翻訳』において切り捨てられたものもあるはずである。・・・それは翻訳不可能で、特殊日本的なものなのであろうか」、と言っているが、これが顕著に見られるのは、下記の書籍である。

Arthur Waley: *The Nō Plays of Japan*. London. First published i. 1921, Third impression 1954.

能における「特殊日本的なもの」の「翻訳不可能性」について、『新版 能狂言辞典』（平凡社 2011.）は次のように言っている。「彼（Waley）は一度も日本に来たことはなく、したがって能を見たこともなかった。・・・生涯能を見る機会のないイギリス人読者に、読んだだけで理解できる詩劇の翻訳を提供することが彼の目的であった。」（400頁）

能『谷行』の英訳に際して、Waleyは、基督教徒のイギリス人には理解不可能な、「山伏修行の厳しさをしらしめ、役行者の偉大なる力をみせる」、「日本の修験道の中心思想を伝える後場の中心部分」53行、即ち、およそ4分の1の本文を省略してしまった。伊藤卓立：プレヒトと能 -pro et contra 『リユンコイス』 第39号 2006. 49-79頁参照。

- 5) この書籍の表題『能の翻訳を考える 文化の翻訳は如何にして可能か 』を考慮すれば、能『浮舟』が想起される。世阿弥は『三道』において次のように言っている：「女躰の能姿、風躰を飾りて書くべし。・・・葵・夕顔・浮舟などと申したる貴人の女躰、気高き風姿の尋常ならぬ懸り・粧を心得て書くべし。・・・開けた懸かりの美しくして、幽玄無上の位、曲も妙声、振り・風情も此の上はあるべからず。」（川瀬一馬校訂 頭注世阿弥二十三部集、能楽社 1948. 114頁）世阿弥の言う能「浮舟」の「開けた懸かりの美しくして、幽玄無上の位、曲も妙声、（此の上もない）振り・風情」を西欧語に翻訳する際の「誤解、誤読、誤訳」、すなわち、その「翻訳不可能性」に星野、およびそのほかの執筆者の苦勞が星野の文言の背景に感じられる。星野は、「翻訳不可能性」が常に付きまとう翻訳を異文化間に掛ける

「船橋」に譬え、いずれ、誤解、誤読、誤訳が見出された場合には、その「浮舟」を新たな「浮舟」と入れ替えればよい、と言いたいのであろう。これが、時と共に、研究が進んで、新たな「翻訳」を発表する意義であろう。

- 6) 『能の翻訳を考える 文化の翻訳は如何にして可能か』, iv 頁。
- 7) 三木 清：文化の根源と宗教 三木清全集 第13巻 岩波書店 1976. 27 頁。
- 8) Goethes Werke. Hrsg. im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen. 14. Bd. Weimar 1887, Nachdruck Tokyo 1975. S. 95. (Weimarer Ausg.)
- 9) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Bd. 2. Stuttgart 1984. S. 102. (KHM 106) なお、引用文中のアンダーラインは著者による、以下同じである。
- 10) 下記 URL から 取得： <http://www.gesamtschule-eiserfeld.de/SZ-Online/07/Dichtung%20und%20Wahrheit/Dichtung%20und%20Wahrheit.htm> (取得日 2022 年 10 月 11 日)
- 11) Karl Hirschbold: Grammatik in Bildern. Zeichnungen: Emanuela Delignon. 2. Aufl. Wien 1988. S. 27.
- 12) [https://www.grimmstories.com/fr/grimm\\_contes/index](https://www.grimmstories.com/fr/grimm_contes/index) (取得日 2022 年 10 月 4 日)
- 13) 下記 URL から取得：  
<https://dillenschneider.fr/de/Gedicht/JacobundWilhelmGrimm/Lepauvregarconmeunieretlapetitechatte.html> (取得日 2022 年 10 月 4 日)
- 14) 下記 URL から取得：  
[https://www.grimmstories.com/es/grimm\\_cuentos/el\\_pobre\\_mozo\\_molinero\\_y\\_la\\_gatita](https://www.grimmstories.com/es/grimm_cuentos/el_pobre_mozo_molinero_y_la_gatita) (取得日 2022 年 10 月 4 日)
- 15) chimney-corner の画像は、その他にも色々見つかる。  
<https://www.lookandlearn.com/history-images/M230476/Chimney-corner>  
<https://thehistoricfoodie.files.wordpress.com/2011/09/postcard.jpg>
- 16) KHM, 2. Bd., S. 426f.
- 17) スペイン語に関しては、下記書籍を参考にした。  
Rodolfo j. Slabý y Rodolfo Grossmann: Diccionario de las lenguas española y alemana. I. Español-alemán. Tercera edición totalmente revisada y muy ampliada por José Manuel Banzo y Sáenz de miera. Wiesbaden 1975. pág. 795.
- 18) Langenscheidt DaF, S. 43.
- 19) A. a. O., S. 44. なお, Sprachgebrauch 「言語慣用 (使用)」と Stilebene 「言語

位相（レベル）」に関しては、『ドイツ言語学事典』（紀伊国屋書店）1994. 880 頁, 956 頁を参照。

- 20) KHM Bd. 1. Stuttgart 1980. S. 17.
- 21) A. a. O.
- 22) Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Urfassung 1812-1814. Hrsg. v. Peter Dettmering. Frankfurt a. M. 1997. S. 413.  
第二版：Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819. Köln 1986. S. 381.  
第三版：Kinder- und Hausmärchen. Vollständige Auflage auf der Grundlage der dritten Auflage (1837). Hrsg. v. Heinz Rölleke. Frankfurt am Main 1985. S. 454.
- 23) Richard van Dülmen: Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit. Erster Band. Das Haus und seine Menschen 16. - 18. Jahrhundert. 4. Aufl. München 2005. S. 59.
- 24) Heyne Bd. 2, S. 1049.
- 25) Trübners Bd.3, S. 470.
- 26) A. a. O.
- 27) Grimm Bd 7, S. 1158.
- 28) A. a. O. IV-2, S. 1748.
- 29) A. a. O., S. 1744.
- 30) vgl. Weigand-Hirt Bd. 1, S. 884.
- 30a) 原文では n. となっているが、わかりにくいので、補って、n(euhochdeutsch) とした。又、その他の引用文中において理解を助ける補遺を行ったが、その部分は丸括弧によって明示した。
- 31) Faulmann, S. 164.
- 32) Walde Bd. 1, S. 357.
- 33) E. Hoffmann-Krayer Bd. 6, S. 1187.
- 34) Weimarer Ausg. 14. Bd. S. 61.
- 35) A. a. O.
- 36) 以下の邦訳書を参照：大山定一訳(人文書院)1960. 40 頁(ゲーテ全集第二巻)。佐藤通次訳(旺文社)1967. 89 頁。高橋健二訳(角川書店)1967. 73 頁。相良守峯訳(岩波書店)1971. 84 頁。手塚富雄訳(中央公論社)1971. 43 頁。森鷗外訳(岩波書店)1972. 96 頁(鷗外全集第十二巻)。高橋義孝訳(新潮社)1973. 79 頁。山下肇(潮出版社)1992. 41 頁。

- 37) Hans Arens: Kommentar zu Goethes Faust I. Heiderberg 1982. S. 145f; und vgl. Aberglaubens-Wörterbuch, S. 1187.
- 38) 高橋義孝『ファウスト集注』(郁文堂, 1979. 63頁)において, 「hinter den Ofen „Christlich Meynender“ の „Faust“ (1728) では, Faust に呼び出された Geist が, Ofen のそばに位置をしめたとある。], という注が付けているが, この注で, Raum „hinter dem Ofen“ や „die Hölle“, 或いは, Ofenbank や Höllbank の正しい理解が背景にあるようには思えない。また, 越塚伸行『ゲーテ ファウスト第一部 解説と注釈』(郁文堂, 1974. 84頁)において Ofen に関する言及は一切ない。
- 39) Duden II Bd. 6 に依ると, ruhen は, „ruhig (I) irgendwo liegen, sich irgendwo befinden“ を意味し, ruhig (I) は, „die Lage, Stellung nicht verändernd, sich nicht od. nur ganz leicht, kaum merklich bewegend; [fast] unbewegt, [fast] reglos“ を意味する, と (2823頁)。
- 40) Richard van Dülmen, S. 60.
- 41) A. a. O., S. 67.
- 42) Trübners, Bd. 5, S. 17.
- 43) Dülmen, S. 38 f.
- 44) A. a. O.
- 45) A. a. O.
- 46) Vgl. Mila Schrader: Gusseisenöfen und Küchenherde: Geschichte, Technik, Faszination. Ein historischer Rückblick. Suderburg-Hössring 2001. S. 12.
- 47) Schmeller Bd. 2/1, S. 226.
- 48) A. a. O., S. 13.
- 49) A. a. O., S. 15.
- 50) A. a. O.
- 51) Hoffmann-Krayer Bd. 6, S. 1199.
- 52) 注 24 を参照。
- 53) Trübners, 5. Bd., S. 17.
- 54) Schmeller, S. 226.
- 55) A.a.O., Bd. 1/1. S. 44.
- 56) ロベール仏和大辞典, 小学館, 1996. 2350頁, 560頁を参照。

後記：

2021年2月に、3年間の経過観察の果てに、機が熟して、湘南地区のとある病院で2週間ほど7階に閉じ込められた。コロナの全盛期でもあり、部外者は病室に入ることは許されず、顔を会わすのは執刀医と看護師と病室の同期の桜。また、コロナの重症患者のために、空き個室はなかったのので、入院中はよく眠れず、毎朝、夜明け前に目が覚めてしまった。しかし、慣れは恐ろしく、時と共に日の出が待ち遠しくなったが、病室の窓は西向きで、海は見えなかった。その代わり、北斎の「赤富士」を楽しむことができた。入院中、とあるテーマから必要があってKHMを読んで暇つぶしをした。すると、本来の目的とは別に、„sich hinter den Ofen setzen“に出会った。「これは一体何だ？粉屋のおやじは大やけどしたいのか、ローストチキンになりたいのか？」この驚きに、自宅へ帰還してから、持てる辞書は総て引き、翻訳資料をできる限り集め、PCに保存した。

ところで去年は、入院中の「赤富士」にNietzscheの„Morgenröthe“を見て元気をもらったので、3年前に資料収集は終わっていた『トラークル対ニーチェ』を『トラークル研究』（第18号）に発表し、退院記念とした。今年は、「粉ひきの老人」を「大やけど」から救出する目的で書いたが、入院の副産物でもあり、やはり一つの退院記念のつもりである。

